

いぶき27号平成25年4月

世界の偉人たち「驚きの日本発見記」

第26回：ウィリアム・エリオット・グリフィス

(1843～1928年)



「一八七一年の日本の進歩の記録はすばらしい。天皇の政府はもう不安定ではない。国家の軍隊が組織された。陰謀や反乱が鎮圧された。出版物が文明の原動力の一つになった。すでに数種の新聞が東京で創刊された。地方の古い支配の形態が国家のそれに吸収された。租税と行政が国じゅうに平等化された。封建制度が死んだのだ。使節団がヨーロッパへ派遣された。使節団の構成は「大君」を代表する身分の低い手先役人でなく、日本と真の統治者のために弁じる皇国の貴族や閣僚であった。天皇は古い伝統を捨てて、今、国民のなかに現われ、屈辱的な忠誠を求めない。すべての階級間の結婚が許され、階

級制度が消えつつある。被差別階級が法によって守られる市民になった。武士の刀が廃止された。国内の平和と秩序は驚くほどだ。進歩はどこへ行っても合言葉だ。これが神のみわざでなくてなんだろう。」

(出典：『明治日本体験記』山下英一訳

(東洋文庫・平凡社)

グリフィスは米国出身の牧師・日本学者で、1870～74(明治3～7)年に日本に滞在し、西洋式教育制度の導入に尽力した「お雇い外国人」である。米国ラトガース大学の古典学部で牧師になる勉強をした際に、福井藩からの留学生であった日下部太郎(幕末の秀才)と出会い親交を結んでいる。その縁により、福井藩の藩校明新館で1871年3月から翌年1月まで化学と物理を教えた後、さらに東京の大学南校(東京大学の前身)に移り、物理、化学、精神科学などを教えている。この間に、天窓のついた「理科室」と大窓のある「化学実験室」を設計しており、これは日本最初の米国式理科実験室と云われている。

1874年7月に帰国したグリフィスは牧師となり、米国社会に日本を紹介する文筆・講演活動を行っているが、上記の『明治日本体験記』は1876年に『The Mikado's Empire』の第二部として刊行され、30年以上に渡って米国で最も人気のある日本歴史書として読み継がれている。明治維新直後の1871年は、①御親兵(明治政府直属の軍隊)編成、②日本語日刊新聞(横浜毎日新聞)創刊、③廃藩置県、④郵便役所設置、⑤司法省設置、⑥文部省設置、⑦東京-長崎間に電信架設、⑧岩倉使節団派遣、⑨散髪脱刀令布告、など多くの改革が次々に行われた年であり、平和と秩序を保った明治初期の改革を『神のみわざ』として讃えている。(M.I)